自分は大丈夫だと思っていた

自宅は、川から少し離れた丘に位置しているのですが、凄まじい雨が降り続き、川の堤防が崩れ、流れる音が聞こえました。川からの増水による被害は今まで無かったので安心していましたが、裏山が崩れ、大量の土砂と水が自宅に押し寄せ、とても怖い思いをしました。主要道路も崩れていましたが、農道を通り何とか避難することができました。

自宅の壁や床だけでなく、家業の牛小屋にも土砂が入り、大きな被害を受けました。復旧には、町内会長をはじめ町内の方、学校や保育園の保護者や同業者など、多くの方の手助けがありました。とてもありがたかったですし、人のつながりの大切さを感じました。

昔は、この周辺の避難場所が私の家でしたので、自分が避難するといった意識はありませんでした。

今回の災害を通じて、災害はいつどこで起きてもおかしくないということを強く感じたのと、事前の準備や早めの避難が大切だと感じました。

被害のあった和賀登さん宅（朝日町西洞）

いつどこで起こるか分からない

和賀登章仁（わがとあきひと）さん（朝日町西洞）

＜災害を振り返る＞

令和２年豪雨災害により被災したお二人にお話をお伺いしました

被害のあった荒井さん宅（久々野町渚）

もし避難していなかったら…

当時、私（紀宣さん）の体調が万全でなく、すぐに避難することが難しいと考え、災害前日に公民館へ自主避難をしていました。そのために、夜中の大雨が降った際は安心して休むことができました。

翌日、自宅へ戻ると、呆然（ぼうぜん）としました。川が氾らんし、家は2メートルほど浸かり、1階の畳は浮き上がり、冷蔵庫やタンス等が玄関に押し寄せ倒れているなど、悲惨な状況。生まれ育った地元を離れることはもちろんですが、子どもの帰る家がなくなり、とても寂しかったです。

避難所での生活や自宅の片づけには、町内やボランティアの方々に助けられました。とてもありがたかったです。

今まで、他人事だと思っていたことを、まさか自分が体験するとは思ってもみなかったです。振り返ってみると、普段は1階で寝ていたので、避難していなかったらと考えると、とても恐ろしいです。

今回の災害を通じて、命があれば何とかなるので、早めの避難が大切だということがよく分かりました。また、避難する際の持ち物を事前に準備しておくことが大切だと思いました。

今までは他人事だと思っていた

荒井紀宣（あらいかずのり）さん、輝美（てるみ）さん（久々野町渚（当時））